

令和3～4年度に係る学長の業績評価について

令和5年9月29日

国立大学法人静岡大学長選考・監察会議

国立大学法人静岡大学長・選考会議は、令和3～4年度に係る学長の業績評価を実施しましたので、「国立大学法人静岡大学長の業績評価に関する規則」第6条及び「静岡大学長の業績評価の取扱いについて」第5に基づき、下記のとおり公表します。

記

1. 経過

(1) 令和5年度第1回学長選考・監察会議（令和5年4月26日開催）

令和3～4年度に係る学長の業績評価（中間評価）を「静岡大学長の業績評価の取扱いについて」により9月末日までに実施すること、学長選考・監察会議による学長へのヒアリングを実施すること、学長が作成する自己評価書様式及び学長選考・監察会議委員が作成する業績評価書様式について確認した。

(2) 令和5年度第2回学長選考・監察会議（令和5年6月28日開催）

学長から、自己評価書に基づき、各評価項目の業績に対する説明があり、ヒアリングを実施した。ヒアリング実施後、委員間で評価区分及び全体を通しての意見交換を行った。

(3) 令和5年度第4回学長選考・監察会議（令和5年9月27日開催）

令和3～4年度に係る学長の業績評価（中間評価）の最終確認を行った。

2. 評価結果の概要

別紙のとおり

国立大学法人静岡大学長業績評価 評価結果〔評価概要〕

国立大学法人静岡大学長選考・監察会議

学長の所信と中期計画等を着実に達成したと認められる

評価対象期間 令和3年4月1日～令和5年3月31日
評価日 令和5年9月27日

内 容

〔教育〕

学長のリーダーシップの下、地域連携を指向する新学部グローバル共創科学部及び山岳流域の地域課題を扱う山岳流域研究院の設置認可を受けたことを、高く評価する。また、情報教育充実の推進や、人文社会科学研究科におけるリカレント教育の体制整備なども、時宜を得た取り組みとして評価する。特に情報学部の数理・データサイエンス教育については外部で評価されており、全学的な発展を期待する。これらの取組みに「静岡大学の特色を生かす」との観点が加われば、本学の特色として外部発信できる成果となることも期待できる。学長の目的とされるところを全面に出して、残り2年間にこれらの取組みをさらに大きく展開され、人類の未来と地域社会の発展に貢献できる人材の育成に着実に取り組まれることを期待する。

〔研究〕

県内大学間の連携強化を図るため、シンポジウム開催などの取組みを進めたことを評価する。また、科学研究費の採択数向上に取り組まれ、一定の成果が得られたことを評価する。学長ヒアリングにおいて、大型研究費の採択数の増加や大学全体の研究力向上に向けた課題に優先的に取り組む決意を述べられており、本学の特色を生かした研究の重点化や支援体制の整備、若手、女性研究者の研究環境の整備と支援など、今後の取組みに期待する。

〔社会連携・地域貢献〕

地域連携を指向した新学部の設置及び流域課題解決に関わる山岳流域研究院の設置により、地域社会の発展に貢献する人材育成の基盤のひとつを整備し、学内外に静岡大学が教育を通じて地域貢献を目指すとの力強いメッセージを発した。また、従前からの県西部地域を中心とした産学連携の関係を維持したほか、多様な地域団体との連携推進や理科教育を中心とした地域貢献、防災総合センター関係教員による災害調査など、多種多様な社会連携、地域貢献に向けた取組みが積極的になされている。加えて、松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会との4者共同による「2030 松崎プロジェクト」の推進、未来社会デザイン機構による「伊豆半島探究学習サミット」の開催などによる地域の特色を生かした静岡県東部地域の振興を支援する新しい取組みが開始されたことを評価する。東部地域の振興支援の規模は小さいが、今後、大学の組織的取組みとして教員が連携することで「地域連携プラットフォーム」の構築が可能となるので、学長のリーダーシップの下、静岡大学独自の地域貢献活動の柱の一つとされることを期待する。なお、実績の出ている取組みに関し、社会に向けて情報発信を行う体制を整備、充実されることもあわせて期待する。

〔国際交流〕

新型コロナウイルス感染症による行動制限のある中、オンラインを活用して様々な取組を推進し、国際的な連携を維持したことを評価する。オンラインのメリットを生かした交流も継続しながら、今後は対面での国際交流活動の再開が強く望まれる。グローバル化推進に向けて、学生の海外留学支援、留学生への支援、ABPプログラムの充実の取組みの推進に期待する。

〔大学運営〕

現物寄附の受入れ体制の整備やネーミングライツ事業の導入など、自己収入拡大のための新たな取組を進めたことを評価する。

浜松医科大学との法人統合・大学再編については、学内の意見が大きくわかれる中、対話を重ね、最終的な着地点を見出すため学内の合意形成に努めたこと、解決に向け学長私案を提示したことにより一定の進展は見られると評価する意見がある一方、学長の業績は協議にとどまり進展が見られない、妥協点に向けた道筋が描かれていない、学長私案の提示は唐突であったとする意見もあり、委員間で評価がわかれた。今後は、学内の合意形成を図り、地域社会の理解を得て、両大学にとって望ましい着地点を見出すため、スケジュールをより意識した進捗と、学長のリーダーシップの発揮を期待する。

〔総括〕

当会議は、業績評価を通じ、学長が静岡大学の教育、研究を発展させるべく、信念をもって、所信と中期計画を着実に実行されていることを確認した。特に、新学部設置や研究力強化に関する課題認識、地域連携の積極的取組みを高く評価する。

一方、浜松医科大学との法人統合・大学再編問題の停滞が大学運営に影を落とし、改革が進まない一因となっていることを危惧する意見も出された。

当会議は、学長が、静岡大学のさらなる発展へ向けた展望を示し、執行部が一致団結して、法人統合・大学再編問題を含む大学運営上の優先課題を展開させることを期待する。